

ネパール 夢の記

---第9次ネパール・ミカの会教育支援の旅---

2005.11.11 ~ 11.21



夢の記

第9次ネパール教育支援の旅を終えて	齋藤 謹也
第9次支援の旅に参加して	今村 旭
お陰様で今年も行くことが出来ました	大石 トキ
支援の旅で思うこと	大谷 安宏
行かねばならぬ!	大塚 正男
混迷ふかまるネパール	加藤 誠一
「ナマステ ミカの会の見習生です」	小泉 光
「瞳」と「微笑み」	齋藤 孝
ネパール雑感	佐々木 富子
サランコットの夜明け	中野 千恵子
久しぶりのネパール行き	沼野 和子
ネパールにて	濱崎 ヤス江
11月のネパール雑感	松浦 陽子
混沌の国へ	和田 寧人
12年目のネパールに寄せて	和田 泰子

第九次ネパール教育支援の旅を終えて

理事長 齋藤 謹也

本年も、無事教育支援の旅を終了いたしました。

十一月十一日から二十一日までの十泊十一日の旅。一行十七名。

シリ・アマリ小学校及びシリ・マズワ二高校校舎落成贈呈式を中心として、ルンビニ、タンセン、ポカラ、カトマンドウの各都市の現況を視察してきました。外務省情報とは異なり一時的かもしれないですが、心配されていた治安の落ち着きにビックリしました。いつもこうならいいですね。加えて、あきらめていたマチャプチャレの雄姿や、フライトから見たヒマラヤ山脈の雄大さ、神々しさに感嘆しながらの充実の旅となったように思われます。

やはり、ネパールは私達の肌合っているなあと妙に納得しながらの旅行は、ほぼ同じような行程、同じようなホテル、同じ観光地巡りをしながら、飽きのこないものであり、それは私だけでなく、何度もネパールに来ていた団員の皆さんの共通の思いのような気がします。

しかしながら、景色は変わらずとも、確実に、ゆっくりゆっくり変化している人の動きや国情の中で、ネパール・ミカの会はどう今後の方向に向かっていくのか、考えさせられた旅でもありました。

私にとっては、初めてネパールに来て、ルンビニに出会って、十年

を過ぎた晩秋（十五回目位の旅）でしたが、これでよいのかなどが、慣れからくる単なる繰り返しの旅に終わっていないのかなどの疑問が、旅の最中頭に浮かび続けました。来年度の十周年事業計画を前に、方向性の確認などを自身に問わなければならないように思われました。

ミカの会は「手から手」「眼と眼」をテーマに直接支援から始まっていますから、「旅」を中核として直に届ける作業は大きなウエートを占めます。そして、それがそのまま、ネパールを好きになる人を増やすステディツアーになっている事かと思われます。

十年という積み重ねによって、私達が想像していた以上の支援実績ができてきました。

そこに、神々や山なみに出会う、世界遺産に出会うという事を織りなして日程を組んでいくだけでも大変な作業となっています。そして、訪問する所が次々と増えてきています。事務局が努力し、工夫しながらの旅日程の実現は、かなり重荷となっているのも事実かと思えます。ありがたいことだと思っていますが、さらに、ネパールの治安状況をみながら、今後どうしていくのかを考えなければなりません。

今回の団員の皆様や会員の皆様のご意見が、本当に必要な時期となっています。私自身も、理事長としての力量不足を痛感した旅でありました。

ところで、ルンビニ、タンセンの子ども達との再会は、私達にいつもと変わらぬ『喜び』を与えてくれます。このミカ（瞳）に出会えることに、癒しを覚えます。

帰国して、いつもの旅行より何となく疲れが残ります。何日か日程が多くなったせいか、それとも加齢のせいかと思いつつ、つい、次回の旅の事を楽しみにしてしまう自分を発見して、苦笑いしています。



“第九次支援の旅に参加して”

今村 旭

一九九七年から続いているネパール教育支援の旅も今回で九次となりました。

昨年第八次の旅の報告に依るとマオイストのバンダに遭い交通の混乱や色々の不安も有った様でしたが、今回は九月よりの停戦の合意により終わってみれば何の不都合も無く全行程を予定通りに消化出来、全員無事に帰国出来て何よりでした。

今回十七名と言う多くのメンバーで、また新たに入会した個性的な会員等新鮮な顔ぶれで旅が大いに面白かった。以下印象に残った事を幾つか記してみます。

見事完成の二校

十一月十三日待望の二校の贈呈式の日が来た。朝霧の中シリ・アマリ小学校に到着した。

もう児童が集まりすっかり準備が整って居た。清々しい朝霧が辺りを包み心地良い。

ここはひろしま祈りの石財団の助成金による建設です。

何時の時も新校舎の落成は心の浮き立つ嬉しい事だ。子ども達は整然

と校庭に座り待っていて呉れた。

華やいた雰囲気のうちいつもの様に贈呈式が進行した。完成に至るまでの色々な準備やたびたびの申請の事務局のご苦労が想いおこされたが、こうして立派な姿を見て、子ども達の元気な様子に触れると何とも言われぬ達成感を覚えるものでした。日程が忙しいので四ツ葉会手づくり袋などプレゼントをして続いてマズワ二高校に移動する。

難民部落を通りぬけて目に飛び込んで来たのは二階建のとても立派なマズワ二高校の姿であった。ソロプチミスト町田さつきと故人となられた植草澄子さんからの寄金をもとに建設された。計画の初めの段階から二階建をイメージしデザインを進めたが、完成した姿はとても立派でこの地方では他に無いもので素晴らしい出来栄でした。

子ども達の数たるやすごく、村の長老たちや関係者も多く大変な熱気で地元の喜びが伺われました。これから高校としての円滑な運営が望まれる所で、完成まで現場をとりまとめたヌルプ・ラマ氏に絶大な感謝の念をもちました。

大活躍のプリンター

今回は加藤、斉藤孝両会員の得意な分野を駆使しての先端技術により写真プリンターが即時かつ高画質に行われとても成果が上がった。バスの中でのプリンターの活用に依り撮影から少しの時間を置いてもう立派な写真が完成し関係者の顔と名前が一致させられ、格段の進歩が有りました。以後も両氏は毎夜の残業で各場面での映像を提供して呉れて誠にご苦労様でした。

四ツ葉会の夢

四ツ葉会はいつも児童に手づくりの布袋を沢山提供して下さつて居る団体であるが、ここに来て、ルンビニ地区に何らかの支援をしたいとの企画が浮かび上がり、資金を集めて支援事業を行うとの希望が当会に寄せられた。全会員が高齢者でボランティア活動に熱意のある団体です。同じ志の当会としてお手伝いをすべく種種の検討をしましたが現在のところシリ・グルワニマイ小学校に図書室の建設をするのが良いかなと学校当局と話を進めています。予定地もほぼ決まり方向性が見えてきましたが、実現までまだまだ様々な作業があり、望みが叶うまで当会も協力して行きたいと思ひます。

合同図書贈呈式

十一月十五日にはトリヴァン大学文系校にて図書の贈呈式が行われた。支援の二つの柱のうちの一方の事業であるが過去四千数百冊にも及ぶ実績はとても貴重な事柄である。

各校の代表が参加してそれぞれに目録を渡すという形式であるがこれらの多くの図書は今後学生たちの勉学や研究に大いに役立つ筈で、数年前の少ない図書に群がる真剣な眼差しの学生の姿を記憶している者にとり大いなる成果と感じました。この事業の継続と更なる充実が望まれます。

塩屋姉妹の教育支援

元祖塩屋の娘とは妹のラダの事ですが、この娘がまだ十一歳の頃からの話です。

タンセンに来る度に成長ぶりを見てきたのですが、ラダが高校生になり、姉のサビタが大学生と成りました。このところの姉妹は目をみはるくらいの大人になってしまった。

最初の頃はミカの会のアイドル的存在でしたが現在は自身のこれからの人生をどう生きるかという岐路にさしかかり、いろいろ思案して居る様です。困つた事に過去にタンセンを訪れた関係者の中に、個人的支援についてかなり希望的発言をして帰つた人が居たらしく、その時の望みを今度私の方に向けて来たのです。十一月十六日の早朝六時にはホテルのロビーに姉妹で現れ、自分たちの将来についてラマ氏の通訳で私に直訴してきました。二人の若い女性の願いといえそう簡単に支援を引き受けるわけに行かず、またそんなの駄目だよと無碍にも切り捨てる訳にもいかず少々困惑しています。さてどうしたものか。

ダーンの居酒屋

スリナガルの坂を下つた所の居酒屋のおじさんは2年前に胃がんの為に亡くなりました。生前は我々がタンセンを訪れたるや素早く動きを

察知して、店の前を何時通るかと首を長くして待っていて呉れました。以前の時のイノシシ肉の美味かった事を覚えています。

通るたびに一休みしてビールを飲んだりウイスキーを買ったりした。あの坂道の楽しみでした。発病前の元気な頃奥さんと一緒に晴れ姿の良い男ぶりの写真を額にいられてプレゼントしたらすごく喜んでいました。今回も別な写真を遺族に届けようかと持参したが、店は閉じたままとの事でとうとう訪れる事無く持ち帰りました。人なつこい友人を亡くしあの坂道が寂しくなりました。

ダーンとはイノシシを撃つ仕事を得意になって私達に示した最初の出会いの時の想い出です。もうあの笑顔には会えない。天国のおじさん安らかに。

なめこの味噌汁

以前にダンパスのバサントロッジで作って以来又調理の意欲が湧きスリナガル・ホテルのキッチンを借りて再び味噌汁を作ってしまった。夕食の準備の忙しい中を五、六人のコックさんの間に割って入り薪のかまどでの調理となった。持ち込み材料は町田のスーパーで探しなめこの缶詰、だし汁の元、味噌等買い、同じ物を家でリハーサル代わりを試しに作りテスト済みとした。本番は手際よくもう鼻歌交じりでパツと出来上がり。こんな事をする客は居ないらしくコックさんも面白そうに見ていた。

結果は上出来。皆に喜んでもらえた。これから又来た時にキッチン

を借りられる様にホテルの社長に話をつけときました。乞うご期待。



ナガルコットの誕生日

不肖私、十一月十一日で六十九歳となりました。旅の初日のパンコクでトムヤンクムで皆に祝って貰った揚句に、誕生日が十一月の加藤さん、中野さん、私の3人で今度は合同にてクラブ・ヒマラヤでのパーティー・パーティーをするという有り難いはからいと成りました。これがまたとても良い記念となりました。

ワインで乾杯しケーキに三人の名前が入り、ローソク三本吹き消し、

サランギの生演奏つきという豪華なハッピー・バースデーとなりました。いつの間にかサランギがバースデーのメロディーとなりホールの相客のドイツ人のグループも巻き込み、レッサンフィリーの曲で踊りも飛び出し賑やかな夕食の誕生会でした。ヤミツキになりそう。有難う御座いました。

結び

さて誕生日といえ私などまだ七十歳前ですが支援の旅の常連の大石トキさんは九十歳目前の大先輩です。元気でいつも積極的、行動的でミカの会の理想の会員です。

今回もスンデー小学校校長より「スンデーの母」と呼ばれ村人達の尊敬の念を一身に集めて居ました。私達も来年は十周年を迎えます。今回の支援の旅も大きな成果を挙げる事が出来ました。これからも斉藤理事長以下全会員一致団結してミカの会が益々発展、充実していく事を祈念致します。

第九次支援の旅が無事に終わる事が出来お世話いただいた関係者に感謝申し上げます。



お陰さまで今年も行くことが出来ました

大石トキ

新聞の片隅に、たまにネパールのニュース。それも不安を感じるようなことばかり。けれど今年も青沼さん、大谷さんの中間調査・実踏されたことをふまえ、また娘の連れ合いも一緒ということで、八十八を過ぎた私も安心して参加できました。

カトマンズは去年より旅行者も多く見られ、ほっとしました。でも車と、特にバイクの数が急増していて、商店街でも我が物顔に走りまくっているのには驚きました。道を歩いていても心配りが大変でした。ルンビニ、タンセンでの訪問校は年々充実され、職員の方も生徒たちも一段と元気な笑顔で迎えてくれて、これまでの効果が目に見えて、支援を続ける喜びと必要性が伝わってきました。(あと何回、自分はこのような旅に参加できるのだろうか。)

去年訪れた時、スンディ小学校は一年しか経っていないのに校舎の白壁は汚れ、それよりもマオイストによる朱書きの大文字に驚愕し、泣きたい気持ちでしたが、今年は洗われたようにすっかりきれいになっていて、本当に嬉しくなりました。いつも困難に立ち向かって、骨身を惜しまず頑張ってくださいるミカの会のホープ、ラマさんがこのことでどんなに苦労されたことか感謝でいっぱいです。子どもたちも

村人も自分たちで、手を入れながら長く大切に使用してほしいと願います。変わらないのはルンビニ地方の、学校にも行けない子供たち。朝夕厳しい寒さの中、素足で衣服もよれよれで薄く、髪もボサボサ、訪れる度に、どうしたらこの子たちにも手が届けられるか？心が痛みます。出発時、会の皆様方のトランクの中身は支援の品々が大半を占めていらつしやるので、私も少しでもとの思いで、衣類を二包み持つて行ってラマさんをお願いしましたら、アデイアリ小学校隣の父親を亡くされ子ども八人を育てていられる方に渡してくださいました。くじやくの住む、林に囲まれた法華クラブは広々と自然をうまく活用し、部屋も大浴場も文句なし。ゆったり、のんびり出来、心身共に癒されました。営業を続けてほしいと切に願います。

チャーター機でのマウンテンフライトは天候に恵まれ、世界一のまばゆいばかりに輝く白い神々しい山々、これ以上ない景観を堪能できて、大満足でした。ナガルコットの三百六十度連なるすばらしい山脈は、深い霧の中に姿をうすめ、本当に残念でしたが、宿舎のクラブヒマラヤは何もかも満足できました。

夕食の時のお誕生会では、熱を込めて打楽器や踊りを次から次と繰り広げ、ミカの会のご常連のみか外人さんも加わり、ついに私も滅茶苦茶ながら楽しく体を動かしてしまいました。一緒に行動できるか不安でしたが、会の皆様がどの方もやさしく親身になってお世話してくださり、何とか落後しないでホッとしました。

ありがとうございました。

皆様方とお別れして、カトマンズ郊外のサンセットビューに移動し
トンビが子育てしている立ち木に囲まれた広い芝生で、背に陽をあび
ながらゆっくり本を開いたり、シャルミラの案内で買い物をしたり、
色とりどりの草花を愛でたり、のんびりのんびりと過ごし、時には日
本からのお客さんから楽しいお話を聞いたりネパール流の毎日でした。
来年はヘリコプターでカリガンダキの大河をひとまたぎして、ツクチ
エへ足を延ばしたい等と夢をみています。



支援の旅で思うこと

大谷 安宏

旅に出るまでは日程に引き摺られている様な気だが、いざ旅となると日程を手繰り寄せながらの毎日の様な気がする。今回の支援の旅はバンコク一泊のカトマンドウ入り、バンコクからカトマンドウ經由ルンビニ直行、バスによるタンセンくポカラ間の移動、ポカラくカトマンドウ間をチャーター機によるマウンテンフライトなど、九月の中間調査時ラマ氏との協議で従来の支援の旅にない内容を盛り込むことにした。

理事増枠に伴う定款変更登記手続きに数度にわたる法務局通い、十月末締めひろしま・祈りの石国際教育交流財団へ助成金申請書の作成と申請手続き、毎週のように開催のイベントへの参加に合せての航空チケット、バンコク宿泊先・バスの手配確認、ビザ取得、支援の旅の説明会、追加・キャンセルの手続き、なかなか連絡のつかないラマ氏との要請ことや確認など充分に固まらない内容のままの慌しく、落ち着かない日々が続いた。毎回のことだが、いざ機上に乗る込むとこれから始まるスケジュールや段取りに不備があっても「何とかなるさ、これで俺の役割は八割完了」と割り切ることにしている。

ひろしま・祈りの石国際教育交流財団の助成金による校舎建設事業は当初ルンビニから西に十キロ程のピチャウワプール村シリ・ジャナジョーティ小学校を対象に申請認可されていたが、治安情勢の不安からルンビニに近いアマリ村シリ・アマリ小学校に対象変更の承認を得て、建設に掛かったが例年にならない雨期明けの遅れに長期間資材の運搬もできぬ状況と、さらに反体制派と体制派の検問の厳しさからラマ氏も容易に現地入りが出来ぬ状況が続ぎ、建設工事を一時的に中断せざるを得ず、三カ月毎に提出の義務付けの進行状況報告書作成には、通信状況の悪さからラマ氏に無理な依頼など大いに迷惑をかけた。

外装仕上げ未完成の校舎を雨期の夏場から当財団の承認を得て引き渡し前に仮使用していたが、真つ白に仕上がった校舎をバツクに執り行われた落成贈呈式を見守ることも達の腫が印象的だった。

国際ソロプチミス町田 さつき、銀座あけぼの植草三樹男氏よりの支援金をもとに建設のシリ・マズワニ高校は土地スペース、樹木保護から当初初めての2階建ての建設を、第八次教育支援の旅の際、現地で突然決定した。今までに経験のない建設物にラマ氏からも再三にわたる問いかけに、イメージ図、建設仕様のやり取りは何回となく重ね、屋上に時計台のある完成予想図を纏めたが、諸般の事情で時計台の設置は残念ながら取止めることとなったが、高校に相応しい風格ある校舎の完成がこの地域の文教地区としての環境を整えたことは大変

に喜ばしいことである。来春、多くの高校生が誇らしく通学するのが待ち望まれる。

今回の支援の旅で2校の完成贈呈式に立会い、校舎の壁に掲げられたプレートに、情勢の悪化の中、また個人的に課題の多かったラマ氏のご苦労と誠意ある尽力に感慨無量であった。その場でラマ氏に心から労を労う一言を掛ける機会を逸してしまったことを未だに残念に申し訳なく思っている。

今回の二校の落成で、九十八年から校舎建設支援の実績は十校三十教室、八職員室、一図書室、一閲覧室となる。これらの建設資金の約八割はボランティア貯金、財団、団体、そして個人によるもので改めて多くの人々の善意よる成果の賜物であることを感謝したい。

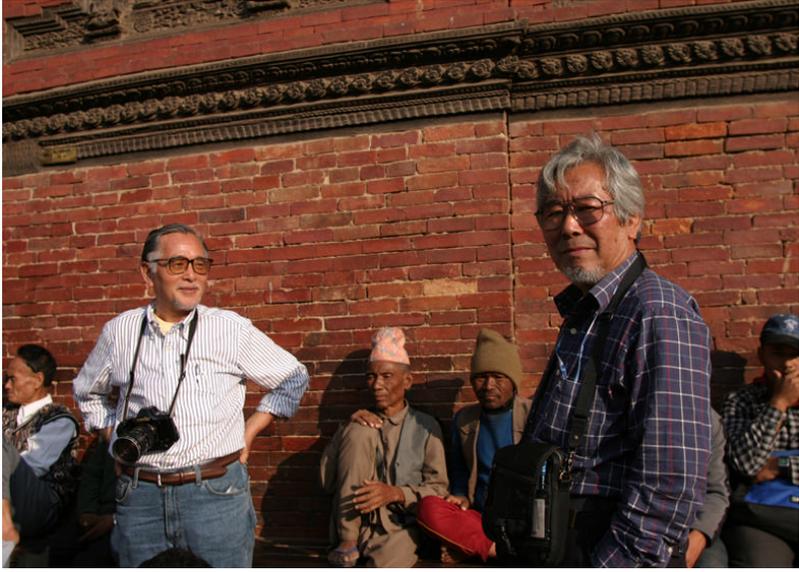
昨年、情勢不安により中断せざるを得なかったタンセンでの図書支援贈呈式は図書を事前に各校に輸送され、目録による会員代表から手渡す贈呈式を含め、九十八年からの図書支援の実績は十一校、延べ四十五校に4670冊の継続支援は学生たちへ大きな成果であると評価されている。これまでタンセン主体から更に支援範囲をルンビニのシリ・マズワニ高校の図書室完成に合わせ、四つ葉会によるグルワニマイ小学校の図書館建設が具体化することにより、この地域の教育環境の向上と共に地域に波及していくことが望まれる。

「継続は力なり」の言葉の通りに校舎建設、図書寄贈を継続して支援していることによる効果は就学率の向上や図書の充実による学力の向上の報告から着実な成果の現われがみられる。反面、我々の活動に理解と賛同を頂き、継続して手作り布袋、こども達へ土産品、計測器、会運営に必要な機材など提供先には、報告を兼ねた感謝の意を表する機会を持つことが、支援の協力を継続して頂くための欠かせない条件であると思う。

先日、日ネ協会主催の講演会でネパールに四十年間在住し、この度ネパール国籍を取得したエベレスト・ビューホテル経営者宮原氏は自主性を重視した援助の必要性を力説していた。ルンビニ地区での未就学率は40%とも50%とも言われることも達への支援のあり方、現在繰り延べとなっている平成十六年度事業計画に掲げるルンビニ地区の教員研修について検討を再開するなど、来年十周年の節目の年を迎えるにあたり、自主性を考慮した支援のあり方について考える時期であると思う。

第九次ネパール教育支援の旅は参加者の皆さんをはじめ、町田から見守って呉れていた留守部隊の皆さん、

そして現地で支援事業を推進実施に一方ならぬご苦労と支援の旅を準備頂いたラマ氏など、多くの皆さんの協力のお陰でスケジュール通りに有意義な旅になったことを心より感謝したい。



行かねばならぬ！

大塚 正男

今年の始めの頃加藤さんから、ネパール行きの誘いを受けた。

ネパール？どのあたりにある国だっけ？とあまり気にもせず季節は移り、秋の気配を感じる頃「大塚さん申し込んでおきましたよ」と加藤さん。へエー俺、行くの！「そう写真を撮るには良いところがいっぱいあるので気に入ってもらえると思うよ。それにタンセンという町は美人が多いので有名です。」よし行かねばならぬ。言ってみよう。美人、この言葉に乗せられて支援の旅の末席に加えて貰うことにした。

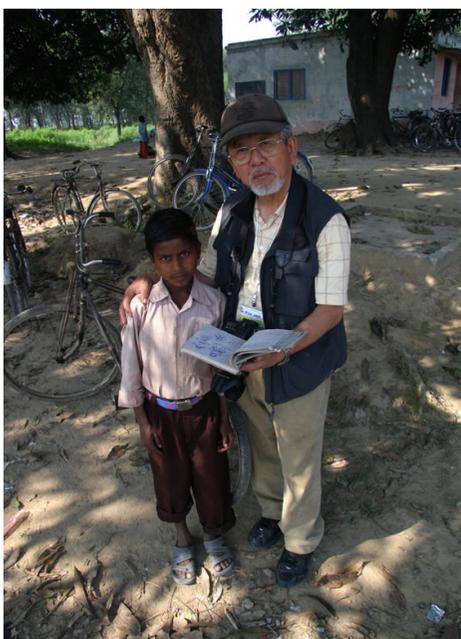
久しぶりの海外旅行。スーツケースに何をどう詰めれば良いのか、カメラはどれにしようか？三脚は？詰めたり出したりの繰り返しでようやくおさまった次第である。

「おじいさん、年なんだから皆さんに迷惑のかからないように気をつけてよ。万が一のことがあっても私は行けないからね。遺体が運ばれてきて見たらおじいさんでなかったりしてちよつとがっかり、ミステリーね。ハ、ハ、ハ」言ってくれるでないの。

ばあさんに送り出されて、町田のバスターミナルでみなさんにお会いしてからは風に流されるように皆さんの後について行くだけ。

ところが問題が起きた。こまった。飛び上がるほどこまった。機内でなにやら記入する用紙が配られた。だめだ！横文字だ。しかも字が小さくて読みづらい。昔、敵国語反対などと黒板に書いて、若い英語教師を困らせた頃が脳裏をかすめる。私の困った様子をみてか、隣の席の孝さんが書きましようか？と言って書いてくれた。有り難い。地獄で仏とはまさにこのこと。

ばあさんに言われたこととは裏腹に誠一さん、孝さん始め会員の皆様に迷惑をかけながらの旅であったように思う。有り難うございました。



混迷深まるネパール

加藤 誠一

帰国してからのネパールはますます混迷を深めている。幸いにして旅の間の治安は予想以上に安定していて、快適な旅を続けることができた。ところが帰国後マオイストは停戦を破棄し、選挙を阻止する活動を開始した。昨年の非常事態宣言以来くすぶっている対立は更に激しく、市民の生活や観光に大きな影響を与えている。

今回の旅の最中は観光客もかなり多く見ることが出来、よかったなあ！と思っていたのですが。

第九次になる支援の旅の大きな目的は完成した二つの学校の贈呈式。昨年の中間調査で訪れた時には工事中だった二校は大変に立派に完成しました。両校ともにそれぞれヒロシマ祈りの石財団、国際ソロプチミスト町田―さつき、故植草澄子さんの助成、協力によって建設する事が出来ました。その間天候の不順や治安の悪化などで工事が遅延したこともありましたが、ラマさんの大変な努力もあり、贈呈式を行うことが出来たことは本当に嬉しいことです。

特に二階建てのシリ・マスワ二高校は素晴らしく、ルンビニ地区の教育支援のシンボルにふさわしい建物です。開校まで図書の使用など多少残された作業もありますが、新高校生の凛々しい姿が目には浮かびます。村人や生徒の努力でいつまでもきれいにしておいて欲しいと願います。

ルンビニ地区での学校や図書館の建設予定がありますが、皆さんの努力で是非早期完成を目指しましょう。

心配していた陸路でのタンセン入りもボンコツバスを除けば通過する村々の様子もわかり快適に移動できました。

タンセンで継続されている図書支援は合同贈呈式の形式をとり、楽しくスムーズに進行しました。まさに継続は力なりです。それにして、も実際図書を見ると大変に立派な図書なのでびっくりしました。

先生方との懇親会は言葉の障害を越え、本当に楽しく盛り上がりましたね。時間の経つのを忘れました。下手な英語を駆使しながらの会話でも結構分かり合えるものです。

タンセンからのヒマラヤの景観を楽しみにしていましたが、残念ながらほんのちよつとのご挨拶しかしてくれませんでした。また次の楽しみという事でしょう。

サランコット、マウンテンフライト、ナガルコットと完璧とは言えない天気もありましたが、素晴らしい旅を続けることが出来ました。特にナガルコットでは誕生日を祝って頂き感謝感激でした。昨年もボカラでお祝いをして頂きました。十一月生まれは得ですね。

今回は所属する写真の会の先輩方をお誘いしたので、いろいろプレッシャーがありました。旅を楽しんで頂けたかどうか？写真を撮る時間があつたかどうか？食事は大丈夫か？天気は大丈夫か？結果はゆっくりお聞きしようと思っております。

タンセンでの図書贈呈式の際、日本の写真仲間から預かった写真を各校に贈呈することが出来て本当に嬉しく又安心しました。ささやかでも出来ることは無いかと、仲間が用意してくれました。本当に有り難うございました。非常に喜んで頂けたので是非継続していくようお願い致します。

初めてネパールを訪れた方にとっては少しばかり忙しい旅だったと思いますが、是非何度でも訪れて欲しいと思います。会の広報担当として私と齋藤孝さんが記録を担当しました。合計五千枚の写真を撮影しました。いつでも公開しますのでご活用下さい。又今回初めて移動できるプリンターを持参しました。主な目的は支援校の先生方や村の方を撮影氏、写真付きの名簿を作成するためです。

これが結構忙しくて大変なんです。写真も撮らなきゃならないし、印刷も急ぐし、でも楽しい作業でもあります。子供は印刷の様子を穴があくほど見つめていますし、運転手さんは自分たちにもくれ！と頼んできます。一月にネパールの学校を調査に行く佐藤会員にはさっそく参考書類として写真付きの名簿を差し上げました。

このプリンターはミカの会が購入した物ですからどうぞご利用になってください。便利になりました。おかげで睡眠時間も減りました。



ネパールには世界に誇るヒマラヤ連峰、自然の動物保護区、カトマンドウには三つの世界遺産都市があります。観光の為にインフラが整備され、市民の皆さんが誇りを取り戻し、観光客を迎え入れる姿勢を見れば世界でもトップクラスの観光立国になれる資質があります。

私の夢はカトマンドウ市内の世界遺産を時間をかけて散策、撮影することです。我が家の環境からまずは二週間程度が限度となりそうですが、数年後には現実にしたいと思います。

カトマンドウ、パタン、バクタプルは今、危機遺産に指定されています。木造の建築物の為に老朽化が進んでいます。そこには昔から生活をしている皆さんがいます。老朽化の阻止は不可能で修復されない無名の遺産はいずれ崩壊してしまいます。

今のネパールは今でしか見ることが出来ません。しっかり見ておきたい。そんな気持ちが膨らみ続けています。

ネパールには儂さがあり、危うい権力争いがあり、人の数より多い神様がいます。

スワヤンプナートの仏塔の眼は今の混沌としたネパールをどのように見守ってくれるのでしょうか？



「ナマスデ ミカの会の見習生です」

小泉 光

きました。実は今村さんが味噌と具をわざわざ日本から持ち込み、厨房を使用して作った、手づくりの味噌汁だったこと。会員の旅の疲れを癒すための心遣いに感動。ごちそうさまでした。

私がネパール教育支援の旅のお誘いを受けたのは、写真仲間の加藤、齋藤孝さんの所属している「写団まちだ」の定例会の場でした。ネパールの様子を加藤さんから聞いたところ、「数十年前の日本の田舎のよう

うで、のんびりと素朴な子供たちや風景の写真が撮れますよ」とのこと。これを機会に参加してミカの会の教育支援を見習生として勉強したいと思いました。もちろん写真も撮りたいと思いました。この旅で感動したことが三つあります。

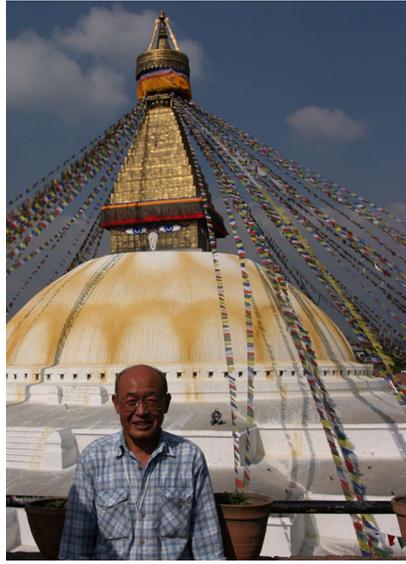
一つ目はタンセンでの合同図書贈呈式の場で、「写団まちだ」から寄贈した写真を、今村さんのユーモアたっぷりの説明とコメントを添えて寄付することが出来たことです。私には本当に勉強になりました。

二つ目は旅のちょうど中間でホテルの夕食に味噌汁がでたのには驚

きました。三つ目はポカラからカトマンドウに向かう国内線でマウンテンビューをしてくれたこと。天候に恵まれ世界最高峰エヴェレストやヒマラヤ連峰を眺めることが出来たこと。

最後になりますが、各支援校での式典の中で参加者の自己紹介の場がありました。私の順番になりましたので、今回準備して頂いたネパール語の参考書を急いでみて「メロナム コイズミ ヒカル ホ」と先生方の前で自己紹介しました。見習生のため、「ホ」の発音が先生方におかしく聞こえたのか、会場が大爆笑でした。又写真も三十六枚撮りフィルムを二十本撮影することが出来ました。現像してみている私の満足できる写真が数枚撮れましたので、大変嬉しく思います。参加された皆さんの協力とご理解があったためと感謝しております。これからよろしくお願い申し上げます。

「ナマスデ 見習生のコイズミです。ダンネバド」



「瞳」と「笑み」

齋藤 孝

ネパール王国の存在は、小学生のころ知りました。それは河口慧海がインドからネパールそしてチベットまで苦しい旅の紀行文を教科書が何かで読んだものでした。また、大学生の頃世話になった長野県戸隠の知人より、ヒマラヤの山々のことやカトマンドウの街のことなど聞かされ、ネパールは宗教と山岳国家というイメージの印象でありましたが、縁がありネパール・ミカの会を知り、昨春入会して会員の皆さんがネパールの話題で膨れあがっているのを、じつと聞き次第に興味を持ち始め、今回の支援の旅に参加をさせていただくことにしました。昨年中国大連に行きましたが、それまでは欧米しか海外旅行したことが無く、アジアそして南方の国への旅行は初めてで、不安・興味・期待で出発しましたが、大勢のベテランが一緒なので、レクチャー・サポートしていただき大変勉強させられ有意義な旅行ができました。

帰ってきた当初は印象的だった街はタンセン、カトマンドウでしたが、時間が経つにつれてルンビニの印象が強くなってきました。釈迦が生まれたのはインドだと思っていましたが、ルンビニで生まれたことを今回の旅行の前にして初めて知りました。縁起とは「すべてのこと・ものは繋がっている」と聞いたことがあります。ルンビニと日本

は深い縁起（仏教）で繋がっていると曰うことに感じるようになりました。

バイラワ空港に夕方着いた時からルンビニ到着までには、私の頭に大きな衝撃が走り続けていました。誰かがここはネパールの町田街道と言っていました。ほとんどが蠟燭の明かりで、その周りに大勢の人が屯していたのが印象的で、彼等の生活ぶりに大きなショックを受けて、法華ホテルに着いたとき我に返り、外の世界とホテルの世界でのギャップにも再び衝撃が走りました。

支援校めぐりで翌朝、朝霧の中の街にデジャビュを憶えましたが、その光景が幕末の原町田の写真と合致したのに驚き、明治・大正・昭和初期の日本人の生活も思い浮かびましたが、当時は庶民の生活は厳しく、日本全国貧乏国でした。しかしお互いの助け合いや思い遣りとか庶民の心は豊かであったと、昔の人々から聞いていました。今の日本は物価が高いものの何でも揃い、品質の良い物は世界中で一番の豊富さを誇っている反面、心は貧しくなり醜い犯罪も増えたことに危惧を感じています。ネパールには日本人が「忘れてしまった心」「失った心」が多くあるように思います。学校はじめどこでも多くの子供達に取り囲われましたが、彼らの「瞳」そして「笑み」に感動を覚えませんでした。彼らの「瞳」からは夢と希望を、そして「笑み」からは助け合い・思い遣りがくみとられ、これからのネパールを担う子供達には、豊かな心を持ち続けて生活経済の向上と、内戦を早く終結させ平和な

国になるように心から祈るとともに教育の支援をし、また日本の子供達にも夢と希望の「瞳」と助け合い・思い遣りの「笑み」をネパールから分けてもらいたく日本とネパールの友好が更に高まるよう小さな力ですが支援のお手伝いをさせていただきますと、新たに思いました。



“ネパール雑感”

佐々木 富子

カトマンドウの空港で、ゴビンダさんの笑顔に迎えられビックリ・・・。

入国審査に大分時間が掛かり、ここは日本ではなくネパールなのだ、と再認識しながら、ネパールの地へ足を踏み入れました。カトマンドウからバイラワまでの、飛行機の中から見た夕暮れのヒマラヤの山々のすばらしさに大感激しました。

バイラワからバスでルンビニまでは、暗い道を一路、法華ホテルへ。ホテルは和風そのもの、夕食後、皆で明日の学校訪問のおみやげの袋詰めをしました。鉛筆・あめ・ボールなどのセットで・・・。ミカの会の皆さんの善意がこの布袋の中にズツシリと詰まっています。明日の子どもの顔を見るのを楽しみに床に就きました。

翌朝、朝霧の中をシリ・アマリ小学校へ。

学校には、既然大勢の子ども達と村人達が待っていました。あまりにも沢山の人数で、ちょっと異様な光景とさえ感じられました。しかし子ども達は、静かにお行儀よく座っていて、落成式の終わるまで、大きな瞳をしつかりと開け、その態度の良さには感心しました。

一人一人からレイの歓迎を受け、「ナマステイ」と合掌しながら挨拶

を交わす時は、本当に心が暖まる思いです。しかし、ここにいる全員の子も達が小学校に入っているわけではなく、就学率が、まだまだ低いとのことです。この小さな子ども達が、就学率100%になる日がいつ来るのだろうか？と考えさせられています。少しでも就学率が上がることを願いつつ学校を後にしました。

ガタゴト道の悪路を走って、シリ・マスワニ高校の落成・贈呈式へ。ここでも沢山の子ども達や村人達の出迎えの多さに驚きました。周囲には、殆ど人家も見受けられない場所なのに、何処からこんなに沢山の人が集まって来たのだろう・・・と思われる。村長さんが「ミカの会のお陰で、ここにバラの花の咲いたような、きれいな校舎ができました。この学校を守って行くのが村人達の役目です」と話されましたが、一人でも多くの子ども達が、この校舎で学んで欲しいと願わずにはいられません。

ルンビニは、カトマンドウより遥か遠く、人・動物が一緒に生活している自然そのものであります。しかし、近代的な生活とは程遠く、子ども達も履き物すら満足に履いていない子もいます。トイレも道端で・・・という光景も見られるなど、今の日本では考えられない面が多々あります。

しかし、子ども達は、弟や妹の面倒をよく見る姿が何か痛々しく、まだ親に甘えたい年齢なのに、小さい時から労働力となり、学校に行ける子は幸せなのだ、つくづく思う状態です。しかし、村人や子ども

達は「ナマステイ」と相手の目を見て、しっかりと挨拶してくれ
ます。ここでは、人間本来の姿が失われていないと思いつながら、ルンビ
ニを後にしました。

今村先生ご自慢の塩屋の娘さんのいるタンセンにやっと来ました。
噂通りの美人姉妹に逢う事ができ、その上、家にまで連れて行って頂
きました。タンセンは、山岳都市と云われるだけあって坂のある町で、
人々も「ナマステイ」とニコニコとても良い表情をしていました。

ポカラでは、早朝サランコットの丘へアンナプルナ・マチャプチャ
レのご来光を見に・・・。雲が厚くなかなか山が雲に隠れ、顔を出し
てくれない。もう諦めようとした時、雲が切れ始め、山が顔を出して
きた。夢中でシャッターを切りました。この日、観光フライトで天候
も良く、ヒマラヤの山々を歓声をあげながら何枚シャッターを切った
ことか！

ナガルコットでは、霧が深く、ヒマラヤの山々は残念ながら見られ
なかつたが、カトマンドウへ向かう途中の段々畑の景観は、本当にす
ばらしく、桜の花が咲き、まるで日本の春を思わせる景色でした。

カトマンドウ市内観光は、首都カトマンドウ、古都パタン、王都パ
クタブル。

三都市とも旧王宮広場を中心に見上げるような寺院の塔都があり、文

化と美を競い合っているようでした。

“ナマステイ”と云ってカメラを向けると、嫌な顔をせずに、喜んで
カメラの方に顔を向けてくれる。ここでは、人間本来の姿が失われて
いないと思いました。

同じネパールの国の人々の生活の差が大きいことに、何とかならな
いのかなあ〜と心が痛みますね。でも、ネパールののんびりした暮ら
し、山々の美しさ何と云っても、子ども達の、あの瞳が忘れられない
旅でした。



サランコットの夜明け

中野 千恵子

ポカラの早朝五時、まだ暗い中、マイクロバスに乗りサランコットに向けて出発。暗いのに、人々が仕事に行くのか足早に歩いている。

ポカラの街を抜けるところに軍隊の検問所がある。今迄タンセンからポカラに来る間に何ヶ所かの軍隊の検問所を通り過ぎてきた。道路にストップマークがあり、タイヤなどで、道の半分位ふさがっていて、エス字のように、ジグザグに走り、検問を受けるのだ。

私達の車の前には「ツーリスト」とかいてあるが、バスのドアマンが軍隊の所に行き、説明をするのだ。その間、兵隊さん達を見ると、若い人が多い。バスの中より、「ニコツ」を微笑みかけ、小さくバイバイをすると、銃を持っている、兵隊さんも微笑み、バイバイをしてくれる。カワイイ。

ポカラも夜中じゅう、検問をしているのだろうか。大変な仕事。兵隊さんは本当に日の出を見にサランコットに行くのか、バスの中に乗ってきて、私達の顔を見る。通行許可が、出た。余り気持ちが良いものではない。バスは走り始め左に曲がり、山道を登っていく。十分位で第一展望台の駐車場に着いた。第一展望台はここから歩いて五分な

ので、まだバスの中にいるようだ。第二展望台はここから、登って四十分位らしい。ラマさんを含め、六人メンバーが行くことになっている。寒いので、手袋をし、懐中電灯をつけながら、月明かりの中、石畳の道を登っていく。第二展望台のあかりも見える。

所々に民家があり、もう起きている家もあり、水場では暗い中、何人かの人が水を汲んでいる。うす明るくなってきた頃、第二展望台に着く。二十五分くらいで、登ってきたのだ。

そこは、お寺があるのだが、今は軍の監視場になっていた。驚きだ。銃を持った兵隊さんがいる。私達以外は、二組ぐらいの外国人が来ていた。汗をかいたので、上着を脱ぎ、飲物をのんだり、お菓子を口にいれ、休憩。下を見ると、ライトが光った。カメラの光で、そこが、第一展望台らしい。反対の下を見ると、ペア湖が綺麗に望める。三十分位で降りられそうだが実際には回りながらなので、二時間はかかるとの事。

周りの山々を見わたすと雲がピンク色になっているが、ヒマラヤは見えそうにもないので、降りることにする。何組かの人が来ていたが、皆さんガツカリしていた。

往きには暗かったので、気がつかなかったが、展望台の下が道以外は、鉄条網が張り巡らされていた。怖い、怖い。チャを飲み茶店に入った。そこで、トイレも借りた。裏の方に案内されたが、ピニールのカーテンが引かれていて、土に、十センチの穴が開いているだけ。ウン困った。

美味しいチャを飲み終えてから、また歩き始める。道際に木の置物がある。キノコ、鳥、動物など若者がコツコツと彫って作ったものらしい。とても良く出来ていて、本物のようだ。台や足などが取り外しが出来て、持ち帰れそう。色を塗っていないものの方が素朴で良い。また、下りて行くと何と山が見え始めた。ラッキー。アンナプルナの山々、マチャプチャレが、どんどん見えてくる。下の展望台でも見えてきて、カメラマン達はバシャバシャとシャッターを押していることだろう。私たちも、興奮して、カメラで、山々を撮る。前日も余り見えなかったので、本当にうれしい。良かった。

次にネパールに来たときは、自分の足で、もう少し近いところで、見たいと思いました。



久しぶりのネパール行き

沼野 和子

昨年は夫につき合っただけで中国長江の旅に出かけて参加できなかったし、今年のネパール行きは三月ではなく十一月になったので、私にとつては二年八月ぶりのネパール行きだった。カトマンズに直行せず、バンコックで一泊というのは初めての経験であつた。

今回の教育支援の旅で最大のイベントは高校の校舎完成の式典に参加することであつた。ルンビニ地区の学校建設に援助を始めて九年、高校の建設は初めて。事務局長の大谷さんのデザインによる校舎だが、白い二階建ての堂々たる建物である。一階は三教室、二階の二部屋は図書室と文化センターになるのだそうだ。広い廊下がついていて、その茶色の手すりが白壁に映えて美しい。貧しいルンビニ地区では一番立派な建物に見えた。

この高校に並んで私たちが9年前、一番はじめに建てた小学校がある。子供たちの光り輝く笑顔に迎えられた。

この笑顔に鉛筆2本と消しゴムというプレゼントしかできなかったが、ささやかだが手から手へという私たちの願いが込められている。

今回の旅行で印象に残つたのは、宿泊で若い市村さんとの同室が多かつたことである。最年長と最年少の組み合わせで、市村さんには迷

惑だつたかもしれないが、私には楽しい経験であつた。

彼女は国立の芸大の学生で、なかなか個性的な女性である。他の人が撮らない小さな生き物の写真を撮つたり、祭りで山羊の首を落とすシーンにもしつかりシャッターを切つていた。

街での買い物にもよく出かけ、夜など「少し遅くなります」と断つて出かけたりますと、私は孫を待つおばあさんの心境であつた。帰るとその戦果を披露してくれるのだが、趣味のよいブラウスなどを選んでいて、翌日から早速着て歩いたりしていた。

行儀が悪かつたり（立つたままの飲食）、後始末が足りなかつたりする場合は遠慮なく注意したが、素直に聞いてくれた。自分の両親より年上の人たちとグループで行動した十一日間。彼女の感想も聞いてみたい。

帰国前日ラマさんにお礼がしたいが、ネパールのものを差し上げるのもどうかと悩んでいたの、お礼状を書くことを勧めた。翌朝早起きして熱心に手紙を書いてきた。そして昨日買った緑色の封筒に入れた手紙を恥じらいながらラマさんに渡していた。

十二月三日ネパールから持ち帰つた民芸品を皆で整理したとき、彼女から預かつた袋からネパールの封筒に入つた手紙が出てきた。皆さんにいろいろお世話になつたお礼や単独行動をとつたお詫びなどが書いてあつた。

若い人はすばらしい。今度の旅で若い人と同室になったことは、私にとっては大きな喜びであった。



ネパールにて

濱崎 ヤス江

今年も又、ネパール教育支援の旅に参加することが出来ました。バンコク経由なら身体が楽だろうと思いい参加を決めたのですが、やっぱりネパールは遠いです。

バンコクに一泊して、カトマンドウに飛び、国内線に乗り継ぎバイラワへ、さらにバスに乗りルンビニ法華ホテルに着いたのは成田を出発して二日目の夕方でした。ルンビニは私が一番好きなおところです。日中の気温は三十度近くあり、まわりは黄金色の稲穂が広がっています。疲れもすっかりとれました。

このルンビニ地区にまた二つの校舎が誕生しました。シリ・アマリ小学校とシリ・マズワニ高校です。贈呈式には子供達と大勢の村の人が集まりました。手から手への支援校がルンビニの村々に広がって私たちミカの会の村にも思えてきました。村の貧しさは変わらないようですが、学校に通う子供達の数がどこも増えているそうです。それでもまだ五割の子供達は学校へ行っていないとか。アメ玉を配った教室では二才、三才の小さな兄弟を連れてきている子が何人かいました。

立派な中、高の校舎が建って進学する生徒たちが、ルンビニの暮らしを考える人に育ってもらいたいものです。

タンセンでは各学校へ目録による図書贈呈式、そして先生方との夕食会で親睦を深めました。教育都市タンセンでは人々との交流がよろこびであり、魅力です。

旅の終わりとなったカトマンドウにはジャンモさんが来てくれました。今は病院で働きながら医師として勉強中とのこと。今回の旅は天候に恵まれ美しいヒマラヤの山々を存分見ることが出来ました。タンセンの山間の道には満開の桜が咲いていました。菜の花やピンクのソバの花の段々畑にも見とれました。

車で移動中、山間部の要所要所には銃を持った兵士たちが検問にあたっていましたが、特に緊張感はありませんでした。休戦期間だったからか、観光客も多く、泊まったホテルは皆賑わっていました。十一日間の長い旅は疲れましたが支援の旅でしか味わえない想いを残す旅になりました。グループの皆さんとラマさんに感謝いたします。



十一月のネパール雑感

松浦 陽子

これまで三月に行くのが恒例だった教育支援の旅でした。治安等の問題で延期になって今回第九次の旅は十一月というベストシーズンになり、内心「ラッキー」と思いました。ここ二年ばかり三月に行くとはマラヤも霞んで良く見えず、ナガルコットではどしゃぶりの雨に降られたりと天候に恵まれず、それがどう言う訳か私が「雨女」のせいだといった間にか決め付けられる原因になってしまいました。どうもナットクイカナイ・・・。

地球温暖化の影響でネパールも最近天候が変化して来ているとは言え、十一月～十二月は観光のベストシーズン。今回の旅もやはりほとんど場所でお天気に恵まれました。

ナガルコットだけは曇りで又湧き上がって来る霧に邪魔されてヒマラヤの雄姿は望めませんでした・・・。

ここ数年支援する学校や施設が増えて来て次々と怒涛のごとく支援校廻りをしなければならず、八日間という短期間では旅程にゆっくり観光を盛り込む余裕などとても無理で、「皆自費で行くのにせめて一日位ゆっくり観光したい」という思いがいつもありました。それで今年第九次は初めてバンコック経由で十一日間と旅程に余裕を持たせた

旅になりました。

ルンビニのシリ・アマリ小学校落成贈呈式、初めての二階建てで高校と図書館が一緒になったシリ・マズワニ高校の落成贈呈式、そして建設支援候補校視察、既支援校視察とルンビニは相変わらず忙しいスケジュールでしたが、村々はいつもと変わらず時間が止まったようなのんびりと穏やかでゆるやかに時が流れていました。子供達も相変わらず裸足で身なりも粗末な様子ですがインド系の端正な顔立ちで大きなキラキラと輝く瞳を持ったステキな子達です。彼らの真っ直ぐな眼差しに出会うと何だかいつも心が洗われる様な気がするのは何故でしょうか・・・。

タンセンにも一年八ヶ月ぶりで行きました。「ミカの会はどうして来ないのだ？」と皆思っていたらしいのですが、マオイストの事が日本であれだけ報じられていたらとても訪問出来る訳ないと私達は思っています、こちらではそういう情報があまり行き渡ってない様です。

このまま平和で穏やかなままのタンセンであって欲しいと願うばかりです。ここでは十二校の先生方に集まってもらい合同図書贈呈式を行いました。今年は理事長をはじめとし皆が交代で図書の目録を渡すという初めてのころみをしました。そして今年は一見報道カメラマンの様な出で立ちの写真の会の人達が四名参加していたこともあり、日本から準備して来た四季折々の風景やら富士山、近代都市みなとみらいやネパールにはない海の様子などとてもステキな写真付きで図書

の目録と一緒にそれぞれの学校に差し上げたのですが、その写真の説明を今村副会長がユーモアたっぷり身振り手振りですべて上げて二重に喜んでもらえました。楽しいひとときでした。

モホン女子校やセン小学校など主な支援校を訪問し、サッカーボールや使い古しのテニスボール、ゴム風船など僅かながら差し上げて、グラウンドで風船を打ち合ったりセン小学校ではドッチボールを教え一緒にゲームをしたのですが、だんだん慣れて来て男の子は力が強いので本気で投げられるとこちらはたじたじで、一度は尻餅を付いてしまったほどです。生徒達との交流は本当に楽しいです。

小学生は特に可愛いですね。写真班の人達はモホン女子高の先生も含む美女達を撮りまくっていた様でしたが・・・。

支援校の先生方との交流食事会も恒例になってきましたが今年は呑むほどに場が賑やかになり、私達も女性軍が「ふるさと」を合唱したりネパール民謡のレッサンフィリりをあちらの先生達と一緒に唄ったり踊ったりとても盛り上がりつつ楽しく交流出来ました。私達の信頼する現地会員のヌルプ・ラマ氏によると先生方もとても楽しかったと喜んでくれたとの事でした。

そんな楽しい思い出を胸にタンセンに別れを告げいよいよポカラへと向かいました。何年振りのポカラでしょうか。以前来た時はダンパスにトレッキングしてそのまま山で一泊する組と山に登らずに下の湖の近辺を観光する組と二手に分かれて行動しました。私は山組みでダ

ンパスに登りそこから眺めたマチャプチャレやアンナプルナ山群の素晴らしさに魅せられてしまいました。懐かしい思い出です。でも今年は残念ながらダンパスへ登る予定はありません。

ペワ湖観光と周辺のお土産屋さん巡りの後チベッタレストランで夕食をとり次の朝サランコットにヒマラヤの山々と朝日を見に行くことになりました。翌朝早くまだ真つ暗な中をバスでサランコットに向かいましたがお天気はいまいちで楽しみにしていたヒマラヤの雄姿と素晴らしい朝日は見られない模様です。頂上まで登る組とバスで登れる所までの組とに分かれました。私はラマさんに案内してもらう頂上組みに入り和田夫妻・中野・梨恵ちゃんと共にラマさんを含む六人で登りました。

やはり頂上に登ってもガスっていて山も朝日も良く見られませんでしたが。あきらめて降りてくる途中でラマさんのなじみの店でミルクティーを飲んだのですが、梨恵ちゃんもミルクティーを作るところをのぞかせてもらっていたので私も便乗して一緒にみせてもらいました。香辛料を最初から入れて煮立たせるやり方とても興味深かったです。途中まで降りて来てふと気づくとヒマラヤが見えていてびっくりし皆で歓声を上げました。いつの間にか雲がなくなり空が晴れて来たのでした。下の人達も皆絶景ポイントで写真を撮ってはしゃいでいました。

そして今回支援旅行に参加した皆が一番期待に胸を膨らませていた世界の屋根ヒマラヤを空から一望するマウンテンフライトの時がやっ

てきました。お天気も上々で絶好のフライト日和。私は前に一度だけ観光フライトの経験がありますがその時は雲に邪魔されて悔しい思いをしたのです。

今回はそのうつぶん迄見事に解消してくれる程素晴らしいフライトになり、皆交代でコックピットに入れてもらってエベレストやその他世界に名を馳せる主だった山々をじっくり見せてもらい一杯カメラにも収め大満足でした。

私の「雨女」の汚名もこれでようやく解消されたことでもあるし…。今回の旅はいつもと逆でカトマンドウに入るのが後になり成田を出発してから八日目ようやくカトマンドウのバイシャリホテルに到着しました。

旅の最後の課題はバザーで売る民芸品を買い込むことです。今回は値切るのが得意な中野さんに買い付けの責任者になってもらい、バクタブル、ボダナート、ボタンにスワヤンプナート、タメル、パシユパテナートと行く先々で少しずつ買って、皆にも買い付けを協力してもらいながら何とか品数を揃えて整理し、皆のスーツケースで分担し運んでもらいました。中野さんご苦労をお掛けしました。旅を一緒にした皆様本当にお世話になり有難う御座いました

長旅ではありましたが心に残る良い旅でした。何かと気使いで大変だったラマさん本当にお疲れ様でした。



混沌の国へ

和田 寧人

ついに念願のネパールの地に立った。

そもそも私がネパールを身近に感じられるようになったのは、大石一馬がネパールの厳しく且つ美しいヒマラヤの山々を写し撮ったボジを見たり、彼が現場仕事で体を張って金を稼いだ後たまたま家で会ったときにぼそ・ぼそ とネパールの事を話す時期であったと思う、その時から既に三十〜三十五年が経過している、その後大石と和田の家には激変があったのである。

一馬のネパールへ架ける想いが身内に伝播したのだらう皆でネパールへ出かける様になっていった。

母を、姉を、妹を、その連れ合いを、娘を、そして孫を成田で見送ってきた、それでも帰ればそれぞれに楽しい話題を提供してくれた、その後家内がミカの会の一員として活動し始めることで更にネパールの方から擦り寄ってきた感じがするのである、ずっと耳学問で知ってきたネパールをいつかはこの目で見たい、エベレスト街道を歩きたいとの願いを抱くようになっていった。

ちょうど今年一月末に定年を迎えた事と政情不安より日程が延ば

された今回の支援の旅のタイミングが合い、同行出来て目的の一つを果たせたのは本当に幸運であったと思う。

今まで見聞きしてきたネパールのイメージは

- (一) ヒマラヤの荘厳さ
- (二) カトマンズの窒息するような雰囲気
- (三) カースト制と男たちのやるきのなさ
- (四) 子供の輝く目

等であった。

これらが初めての体験でどう映ったのか記したいと思う。

バンコックよりの飛行機からネパールを初めて目にしたのはやはりヒマラヤの氷の山々であった、写真の如く青空とくつきりと一線を画す姿はこれからの旅の幸先の好さを告げているように思えた。

その後ポカラからカトマンズへの空の旅は聳えたちどこまでも続く山、氷河、エメラルドグリーンの水河湖と何時までも見飽きることはない世界にいるようであった、やはりヒマラヤはネパールにとって最大の財産である。

こんな感激を味わうことが出来て空の旅を企画して戴いたミカの会の理事の方そしてネパールのラマさんにとっても感謝しています。

カトマンズの印象は喧騒と雑然さ空気の悪さは、車・バイク・リキシャ・自転車・歩行者がやかましいホーンと共に混然一体で動いているものの想像していた程ではなく、旧態依然はどこにも見受けられるものの近代化へ変化の兆しがあり活気に満ちつつあると思う。

それにしてもこの急激な近代化は生活格差の面で地方と大きなギャップが生じ同じカトマンズ内でも更に拡大する事は必至である、過去の日本に見られたように避けて通れない過程ではある、しかしカーブト制からの脱皮無くしては全体の生活向上は遅くなるのではと思える。



ルンビニという農村では 道沿い家の前のベンチで所在無げに座っている男達がバスから見られ、そして家の中は土間に番棚のようなベツドのみであった、ずつといにしえの頃より住居も食生活も衣も変わっていない様に見える、それでも子供たちが学校に来て学ぼうとする意欲や勉学する姿を見れば明日がいつか来ると感じられる。

この手の届かないところを支援しているからこそミカの会の存在は貴重であるといえる。

支援の旅に同行してミカの会のやって来た道程がよく理解できた。また九年に渡る地道な努力に支えられた実績は素晴らしいものである。

各地での歓迎を見るにつけても期待され、待たれていることが分った。これからもネパール人にとって必要な組織であると思う。

来年十周年を迎えるミカの会としてより良い支援とすべく、入れ物を作る、図書を与えると共にソフト面つまり人の質を上げる（人材育成）支援も同時に考えてよいのではないだろうか、国の基本は人であると思います。今回ネパールで感激した一つに人々の優しさです。ギスギスした人、人を押しのけて主張する人は見かけませんでした。もちろんネパールにも裏があつて近づく者がいます。

それでも今の日本人には無い物を沢山持っていると思えました。

気の張ることも無く楽しい旅をさせて頂き、食あたりもせず無事帰ってこられ本当にお世話になりました。いつか遠くない時期に二つ目の目的を果たすべく体力を維持したいと思っていますこのごろです。



十二年目のネパールに寄せて

和田泰子

今、ネパールは激しく動いている。
どこに向かおうとしているのか？
好くも悪くも動いている。
誰にも止めることはできない。
その中で、ずっと変わらないもの。
いや、ずっと変わらないでいてほしいもの。
私を引きつけてやまないもの。
子どもたちの笑顔、力強い瞳、待っている人々、
とてつもなく大きく地球にそそり立つヒマラヤ。
けれど、これもまた動いている。
願わくば、この流れが子どもたちの、人々の
しあわせにつながりますように！
そこにネパールがあって、
そこに弟がいて、
母がいて、

家族がいて、
仲間がいて、
今の私がいる。
感謝あるのみ。



ネパール・ミカの会



ネパール夢の記 第9号

NPO 法人ネパール・ミカの会教育支援の旅

発行日：2006年1月31日

発行所：東京都町田市忠生2-5-36 こもればび堂内

NPO 法人ネパール・ミカの会

電話：042-797-3675

ホームページ：www.nepal-mika.jp